

せてくる

十亀弘史

デリケートだが決定的に異なる、現実の〈我〉と短歌の中の〈我〉についての一首。両者は確実にちがうかのように表現されているが、じっさいは微妙である。万葉集研究者・伊藤博氏の、「柿本人麻呂・歌俳優説」が、和歌史の中で具体的にこの問題を論じた最初だったように思う。一九六〇年前後のことだった。

みずずかる信濃濃き秋背伸びしてウツドデツキに流星を待つ
塩川郁子

星がきれいに見える信濃地方で、流星を見ようとしている場面。「ウツドデツキ」が高原らしい雰囲気を与えている。澄んだ空気を表現するのに、「みずずかる信濃濃き秋」が、うまい。私は星に関して詳しくないが、「ふたご座流星群」とか「ペルセウス座流星群」など、折々、ニュースになる流星群をイメージしているのだと思う。

指のあひくまなく舐めてこれの世の万事は諾と猫眠りたり
花美月

指を一本一本舐めてやがて眠るまで、作者が猫の仕草をじっと見ていた何分間かの時間が主題である。「これの世の万事は諾」がユーモアの味つけ。猫好きの作者ならではと思わせる。

揉みあへる波をはなれて白き泡砂の傾斜を音なく進む
松橋雅実

砂浜に打ち寄せる波の一部始終を、ていねいに見て、ていねいに言葉化した一首。「白き泡波を離れて……進む」とつづくと細部を描写した丁寧さに注目する。

木下利玄の歌集『紅玉』に収録されている有名な「波浪」十三首を思い出す。打ち寄せる海の波だけをうたった評判の高い十三首である。「泡」が出てくるのは最後の一首だけ。引用しておこう。「くだけたる波の白泡いつさんにひろがりつめんどきほひ寄せ来も」。大正六年の作である。

花の黄にみな癒されて顔明るし南房総菜の花岬
蔵田道子

発音してみると、下句「南房総菜の花岬」が断然調子がいいので、なんとなくコマージュのような感じもするが、旅の歌として、というよりも観光の歌として、とてもいい。とにかくおぼえやすい。一度読んでみればおぼえてしまう。愛誦性のある作として選んでおいた。

紙を折りハサミで切ったこの凶形広げるまでの清らかな時間
田中和美

寄席などでときどき見るプロの切り紙細工だろうか。それとも自身で切り紙細工をしているのだろうか。どちらでもいいと思うが、「この」があるので、私は後者と読んだ。ドキドキ感を表現した下句、いい。

人の死を伝えるときも乱れない表情口調は訓練されて
加古陽

テレビ画面のニュースキャスターに取材しているのだと思う。同じくマスコミュニケーションに関わる一人として、訓練によって個人の心情を殺すことの是非について考えるところがあるのだろうか。